

宿毛と野口雨情～酒井明 説話集24※～

「あの町この町日が暮れる、今来たこの道戻りゃんせ
磯の鵜の鳥や日暮れにゃ帰る」

明治に生まれ、昭和20年にこの世を去るまで、船頭小唄や、はぶの港、十五夜お月さんなど、今に親しまれる名曲を残した野口雨情。その彼が宿毛を訪れたことを知る人も今は少ないのではなかろうか。

色々調べてみると、どうも昭和12年の春頃のこと、彼の晩年の旅だったといえるだろう。

宿毛に残る彼の作品からは、素材を広くつかんで作詞する気風が察せられるが、どなたも同感ではなかろうか。

芭蕉は、旅を愛して旅に詠う。彼もまた、同様であったのではなかろうか。

彼の宿毛訪問以来すでに50年、当時宿毛湾は海軍艦艇の投錨、宇須々木海軍航空隊基地があり、ある人は宿毛に関わるものとして、連合艦隊水兵さんは、すめらみ国の海守る、宿毛湾はサンゴの港と上げておる。

そうした時代背景も歌の中に盛り込まれる可能性はあったであろうが、地元に残る宿毛小唄では

「宿毛湾はサンゴの出どこ 上がり下がりの船がつくアリヤセ アヨイヨイ 船がつく アユは瀬をゆきホタルは草にアリヤセ 月は荒瀬の山の端に アヨイヨイ 山の端に」

となり、お終いには

「迷うてくれるな飛行機さえもアリヤセ 宿毛宇須々木 宿毛宇須々木さして来る アヨイヨイさして来る」

と、さしての盛り込みはなされていないと思えるのだが、どうだろうか。

もし、連合艦隊水兵さんとは歌っていたことをご存知の方がおられましたら教えてください。

雨情の目に映った当時の宿毛から、50年の隔たりを持つ現代の宿毛。今彼が訪れたとしたら何をどんなに詠うだろうか。今昔の感いかにといいところであろう。

「沖の夕焼け白帆は帰る アリヤセ 松は下り松 松は下り松 青々と アヨイ アヨイ青々と」

その下り松や大浦からの沖の眺めも、だいぶん変わってきたと感じる人も多いでしょう。

※) 平成26年3月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

